



よしなが りみこ
吉永 理巳子 さん

1951年6月2日生まれ

1954年3歳の時に、父が急性劇症型の水俣病を発病。2年後に亡くなる。同1956年漁師で9年間寝たきりだった祖父も死亡。

1997年10月から水俣病資料館の「語り部」となる。リグラス工房「びんの風」主宰。2011年環境マイスターに認定。水俣病患者家族としての体験、勇気をもつ事の大切さなどを伝えている。

水俣病資料館語り部の会副会長。

水俣市明神町在住。

私は明神で生まれ育ちました。祖父は漁師で手漕ぎの船で漁をしていました。水俣病の発生当時、近所には4件しか家がなく、みんな畑で野菜を作り、漁に出て魚を捕ってきて食べる自給自足の豊かな生活をしていました。私の家族は祖父母、両親、兄弟4人の8人でした。父はチッソに勤めていました。まず、祖父が1948年頃発病、父も1951年36歳の頃発病しました。仕事が終われば魚を捕りに行き、刺身にして、お弁当にも持って行っていくほど魚が好きでした。チッソ付属病院に1年位入院しました。入院中は病院食を食べるので症状は進みません。退院したら、栄養をつけるため魚を食べていました。症状が重くなり、2回目入院した時は痙攣がひどく、20日後、38歳で亡くなりました。それから一ヵ月後9年間寝たきりだった祖父も亡くなりました。

友達を家に連れてくることはあまりありませんでした。家族のことを話したくなかったからです。今思えば、自分の中で逃げていたんです。40年近く、水俣病という声が聞こえると耳を塞いでいました。15年前にもやい直しが始まり、水俣病に関する本を開き、もっと早くチッソの廃水が原因とわかっていたのに止めなかった国、止められなかったチッソのことを知りました。父の無念さはひとしおではなかったと思いました。水俣病の被害については調査されていません。早くに調査をすれば、症状や治療方法がわかってくるのにそれすらやっていない。事実をきちんと受け止めて対処しないといけない。それが水俣病の教訓だと思います。

【写真；海に向かって祈る魂石】